

程度副詞の「ちょっと」の意味解釈に関する 音声的要因について

呂 妍

The Effect of Phonetic Factors in Interpretation of Japanese Degree Adverbs *Tyotto*

Yan LYU

Abstract

When *tyotto* is used as a degree word, it can be interpreted literally or not. In the sentence *Ano mise, tyottooishi rasii, zehi iku to ii yo*, *tyotto* can be interpreted as a high degree contextually. Despite contextual factors, phonetic factors can also affect the interpretation of such *tyotto*. Concentrating on the pattern of *tyotto* + *adjective*, the paper aims to investigate the correlation between the interpretation of *tyotto* and phonetic factors in specific contexts based on a listening experiment via PRAAT. Based on the experiment results, two conclusions were drawn.

The meaning of *tyotto* is influenced by both context and phonetic factors. First, *tyotto* tends to be interpreted as a high degree or negative meaning when used in a context of recommendation, dissatisfactory expression, or as a single-word sentence. Second, in specific contexts, the semantic interpretation of *tyotto* can be influenced by its phonetic adjustment. In the same context, *tyotto* tends not to be explained as a literal meaning, which is pronounced in a low pitch or with irregularity. It was revealed that contextual factors are primary factors and phonetic factors are secondary factors.

For degree expressions representing relative degrees, their semantic interpretation depends on the mutual understanding of the speaker and listener. Besides contextual factors, phonetic adjustment is important to achieve more ostensive communication. Although it seems that *tyotto* is used as a moderate expression of politeness, from the viewpoint of relevance theory, it is possible to calculate the degree of implication from both contextual and phonetic factors.

1. はじめに

程度副詞として使用される「ちょっと」は、複数の意味と機能を持っている。『日本国語大辞典』では、「時間、物事の量や程度がわずかであるさまを表わす語。すこし（下線は筆者による。以下略）」と記述されている。例えば、

(1) ちょっとお願いしたいのですが…（作例）

という文脈では、「ちょっと」は「他者の負担を最小限にせよ」というポライトネスの原理によって、「低程度・少量」として解釈され、相手の心理的ストレスを和らげる機能を持っている。一方、

(2) あの店、ちょっとおいしいらしい。ぜひ行くといいよ。（作例）

という文脈では、「ちょっと」は必ずしも「低程度」を表すというわけではなく、「非低程度」として解釈される可能性もある。「非低程度」の「ちょっと」に関して、辞書にも

(3) a. (副) 大層というほどではないが、かなりの程度・分量であるさま。

「その道では一名の通った人」（『大辞林』1988 第一版、2006 第三版）

- b. 〔副〕〔逆説的に〕存外。かなり。

「一金がある」 (『広辞苑』1960 第一版、2008 第六版)

- c. 〔副〕〔逆説的に〕まあまあ。結構。

「この靴—いいんじゃない？」 (『明鏡国語辞典』2002 第1版、2010 第2版)

のような記述が見られる。このように、程度修飾としての「ちょっと」の意味解釈は異なる場合がある。

文脈的要因の他に、「ちょっと」の意味解釈には音声的要因も関わる。彭 (1990: 70) は、「一文で音声的特徴 (声の高低、強弱、長短) によって意味変化を引き起こすことがある」と述べている。特に、同一の文脈では、

(4) 甲：ゴルフはできますか？

乙：ちょっと (彭 1990: 71)

という一語文の「ちょっと」の意味解釈は音声によって変化すると指摘している。彭 (1990) は、一名の日本語音声学の音声に基づき、「ちょっと」の意味解釈と音声的要因との相関を記述しているものの、一語文の「ちょっと」とどまり、「ちょっと+被修飾語」という程度修飾の「ちょっと」については触れていない。では、文中に見られる程度修飾の「ちょっと」の意味解釈はどのように音声的要因と関わるのか。本稿はこの問題について検討したい。

2. 程度修飾の「ちょっと」の意味解釈

渡辺 (1990) や仁田 (2002) によって、「ちょっと+被修飾語」という文型では、文法上「ちょっと」は「低程度・少量」を表す。本稿では、「ちょっと」が程度を修飾する場合の意味上の分類について、「低程度・少量」と読み取られる意味を「ちょっと」の程度修飾の「本義」、これに対して「非低程度・非少量」と読み取られる意味を「ちょっと」の程度修飾の「非本義」と呼ぶこととする。

実際のコミュニケーションでは、ポライトネス・ストラテジーとして緩和機能を果たす「低程度」の「ちょっと」が使われているにもかかわらず、実際に話し手が聞き手に「ちょっとだけではない」という「非低程度・非少量」の意味を伝えたい場合がある。例えば、

(5) ちょっといける刺し身ですから、やってみてください。(中道 1991: 150)

という文脈では、「ちょっと」で「いける」を修飾し、「程度が高いこと」を表すと中道 (1991) に述べられている。

この用例は、従来のポライトネス理論では、聞き手に刺身をすすめる時、話し手が「ちょっと」の低程度の本義を利用して自分の強いすすめを緩和し、相手に判断の余地を与えるものとされる。それとともに、相手にすすめるという文脈である以上、実際に話し手と聞き手は「刺身の美味しさの程度が高い」と認識できる。なぜ「低程度」ではなく、「非低程度」であるかと言うと、それは話し手と聞き手は関連性理論を利用して、文脈的效果を計算した結果だからである。

関連性理論によって、話し手は「ちょっと」を使うものの、「やってみてください」というすすめる文脈で、聞き手に「低程度ではない」という伝達意図を認識させる。聞き手は、「相手にすすめる」という意図明示的伝達によって、「ちょっと」は「非低程度」の意味を表すはずだと推論できる。

このように、「ちょっと」は文脈的效果によって、「非低程度」を表す場合があることがわかる。しかし、本稿での「ちょっと」は単純な「本義・非本義」という多義性の問題とは扱っていない。その文脈の内部で、ポライトネス表現として使われる場合、「低程度」の本義の意味も存在している。その上で、ポライトネス表現を含めた文脈的效果によって、それがそのまま「低程度」を表すか否かという問題が生じる。文脈を総合的に見れば、関連性理論の意図明示的伝達によって、「非本義」という意味で解釈される場合がある⁽¹⁾。

文脈的要因の他に、Sperber & Wilson (1995: 259) は、音声の変化が一定の意図された文脈的效果を特定す

(1) このような非本義として解釈されるメカニズムは言葉の語彙的意味にもやきつけられ、(3)のように、一般の辞書には本義と非本義の両方が記載されている。

ることに経済的な方法を提供していると指摘している。つまり、音声的效果もその意味解釈を計算する手がかりの一つとなるのである。

郡 (1989: 334) は、強意の「スゴく」の強調に関しては、「スーゴク」「スッゴク」「スンゴク」のように母音の長さを臨時的に延ばしたり、語の一拍目の後に促音や撥音を挿入したりして強調効果を高めることがあると述べている。「ちょっと」の場合も、母音の延長や高いピッチの発音によって、その意味解釈が影響されることが考えられる。同じ「ちょっと」でも、その文脈を調整した場合、音声的效果によって、「本義」以外の意味解釈が生み出される可能性はある。

本稿は、ポライトネスによる緩和機能を認めた上で、Sperber & Wilson (1995) の関連性理論を援用して、
(6) 課題Ⅰ：特定の文脈では、「ちょっと」の音声的变化に「ちょっと」の「本義・非本義」という意味解釈が影響されるか。

(7) 課題Ⅱ：特定の文脈では、「ちょっと」の音声的变化がどのように程度の意味解釈に影響を与えるか。
という2つの課題について、聴取実験で考察したい。

なお、山岡他 (2018: 157) では、(8)と(9)のように、

(8) その金額はちょっと無理かと思いますが。(山岡他 2018: 157)

(9) 東京育ちの君にはちょっとわからないかもしれないけど。(山岡他 2018: 157)

「ちょっと」が厳密には「わからない」「無理」という程度性が読み取りにくい語を修飾することがあると指摘している。この場合、「ちょっと」は「緩和機能だけが残って慣習化し」、「低程度の意味は完全に喪失している」ものだとされ、程度修飾の「ちょっと」として扱われていない。本稿では、「ちょっと+被修飾語」の形を取るもののうち、本義としての解釈も可能な程度概念修飾の場合のみを取り上げることとする。

また、(4)のような応答に用いられる一語文の「ちょっと」については、「ちょっとできます」に復元できる場合、「ちょっと」は程度修飾として扱うが、復元できない場合、程度修飾としては扱わない。それは、「ちょっと……」で話し手の答えたくない気持ちを表す別用法として扱えるからである。

また、程度修飾の「ちょっと」を考察するため、本稿は呼びかけ、言いよどみ、フィラーなどとして使われる「ちょっと」を除外する。

以上、「ちょっと」に後接した語の程度性が読み取りにくい属性の不在の場合、程度修飾の「ちょっと」とせず、本稿の考察対象外とする。

3. 聴取実験概要

3.1 実験文の作成

3.1.1 実験文の文脈

聴取実験の内容は二つの部分に分けている。一つは(10)のように、「ちょっと」に程度性を持つ被修飾語が後接するものである。

(10-1) あの店、ちょっとおいしいらしい。ぜひ行くといいよ。

(10-2) A：ごめんごめん。
B：ちょっと遅いよ。

(10-3) A：今日は寒いのか？
B：昨日よりちょっと寒いよ。

(10-4) A：水泳はできますか。
B：ちょっとできます。

もう一つは、

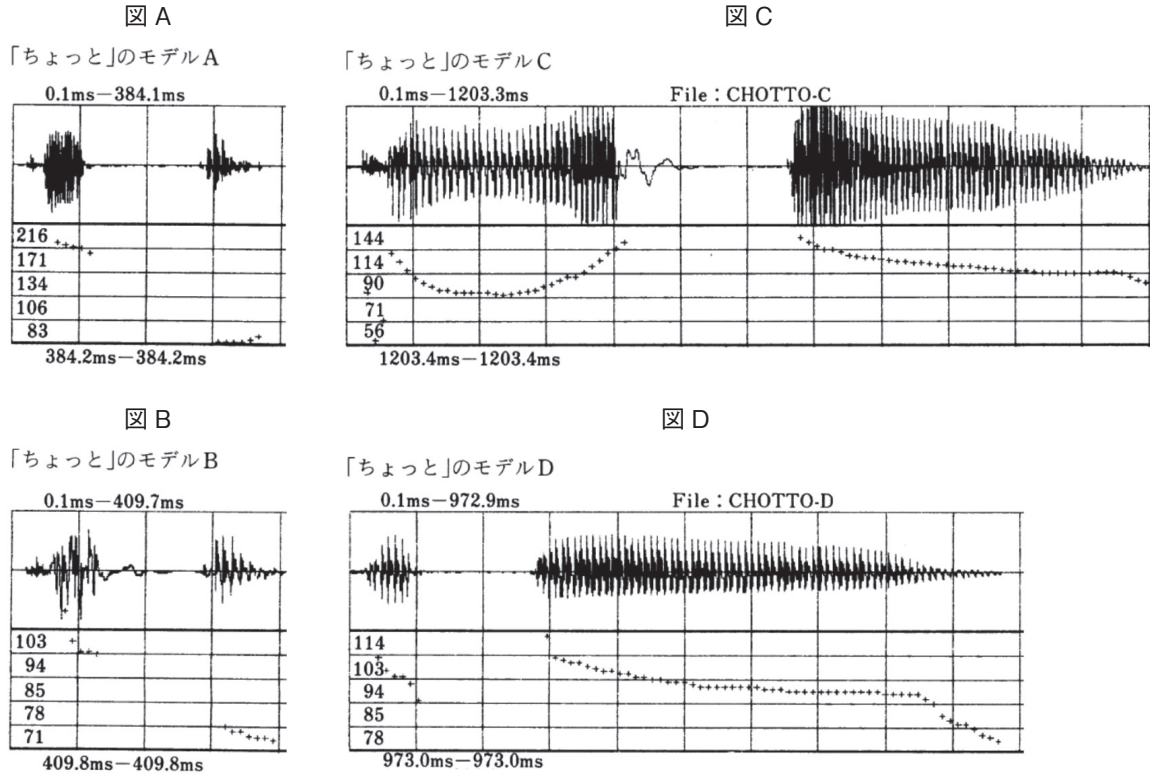
(11) A：水泳はできますか。
B：ちょっと

のような一語文の「ちょっと」である。一語文の「ちょっと」は程度修飾の「ちょっとできます」に復元される可能性もあり、比較のために実験文に入れた。

3.1.2 「ちょっと」の音声

「ちょっと」の音声は彭（1990）を参照した。彭（1990: 72-73）では、一語文の「ちょっと」は(12)に示す4つの音声モデルで発音されている。

(12) 彭（1990: 72-73）の一語文の「ちょっと」のピッチ曲線



(12)に示す4つのモデルのピッチレンジや持続時間を表1にまとめてみた。そのうち、モデルDは「と」が著しく長く延ばされており、文中に出現しにくいと考えられる。また、モデルBはモデルAと類似しているが、モデルAのピッチは「高→低: 216 → 83」であるが、モデルBは「高→低: 103 → 71」である。つまり、モデルBのピッチレンジはモデルAより明らかに小さいことがわかる。本稿では、モデルAのように「ちょっと」のピッチレンジが大きい音声を「ちょっと1」と記し、モデルBのように「ちょっと」のピッチレンジが小さい音声を「ちょっと2」と記す。そして、モデルCのようにピッチ曲線が「低→高→低」になる音声を「ちょっと3」と記し、イレギュラーな音声の典型例⁽²⁾として扱う。

さらに、本実験は「ちょっと」の音声的効果について調査を行うため、同一の文脈では、「ちょっと」以外の要素の音声を同じに設定する。言い換えると、同一の文脈に関する三つの音声は、三種類の「ちょっと」と、

表1 彭（1990）の一語文の「ちょっと」のピッチ及び持続時間

	モデル A (図 A)	モデル B (図 B)	モデル C (図 C)	モデル D (図 D)
最大ピッチ (Hz)	216	103	144	114
最小ピッチ (Hz)	83	71	90	78
ピッチレンジ (Hz)	133	32	54	36
持続時間 (ms)	384.1	409.7	1203.3	972.9

(2) 複数の母語話者に典型的なイレギュラーな「ちょっと」を発音してもらったところ、それらのピッチ曲線は「ちょっと3」に近いものであった。これを踏まえて、実験音声を決定した。

同一の「おいしいらしい」のような被修飾語とを組み合わせ作成した実験文の音声である（後述の表2を参照のこと）。

その他、(11)の一語文の「ちょっと」の実験文の音声に関しては、表2の3種類の音声の他に、彭（1990）における一語文の「ちょっと」の意味解釈と比較するため、モデルDのように「と」を延ばす「ちょっと」の音声についても考察する。本稿ではその音声を「ちょっと4」と記す。

3.1.3 実験文の音声の作成

まず、音声は1名の日本語母語話者⁽³⁾が読み上げた文を録音し、録音データから、「ちょっと1」「ちょっと2」「ちょっと3」に近い音声と被修飾語の音声をピックアップした。

次に、(10)の実験文について、「ちょっと+被修飾語」というパターンで、各文脈において同じ音声の被修飾語と組み合わせ、音声が可能限り自然なものとなるように、実験文を作成した。その他に、(11)の一語文の「ちょっと」は以上の3種類とともに、「ちょっと4」を含む実験文も作成した。

3.2 実験の実施

2017年12月から2019年5月までの期間に、調査者（筆者）が計30名の協力者（日本語母語話者⁽⁴⁾）と個別に面接して、聴取実験を行った。

Praatで標準化された知覚実験方法（Praat Script）で実験を行った。全ての実験文の音声は合計で4回ずつ流れるものとし、被験者はそれらが無作為な順番で聴取するように設定した。協力者は各文における「ちょっと」が表す程度について判断して、「0」、「少しだけ」、「普通に」、「普通以上」、「とても」、「不自然」という選択肢⁽⁵⁾から選ぶ。なお、協力者の「程度」についての判断結果はPraatによって自動的に収集される。

4. 調査結果及び考察

以上のように、各実験文について120回（1文×4回〈ランダムに重複〉×30名=120回）の判断結果を収集した。以下、判断結果に対して統計的処理を施した上で、各実験文の「ちょっと」の意味解釈と音声的要因との相関について考察する。

4.1 「ちょっと」+プラス評価の形容詞

まずは、実験文（10-1）「あの店、ちょっとおいしいらしい。ぜひ行くといいよ。」の音声情報を表2に、判

(3) 実験文の読み上げに協力してもらった日本語母語話者は東京に近い神奈川県出身の日本語学専攻の大学院生である。

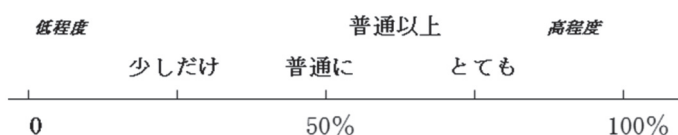
(4) 30名の母語話者を年齢・性別で表12にまとめた。

表12 聴取実験協力者の情報

年齢 \ 性別	女性	男性
27歳～70歳	11名	7名
20歳～22歳	6名	6名
総計	17名	13名

(5) 聴取実験を実施する前に、以下の図1に基づいて、程度スケールを利用して、各選択肢が表す程度領域について説明した。そして、「0」は「まったくおいしくない／寒くない」などのような意味を表すこと、「ちょっと」の音声や使用を不自然だと判断された場合は「不自然」という選択肢が選べることをも説明した。

図1 聴取実験選択肢の程度領域



断結果を表3にまとめた。

表2 「ちょっとおいしいらしい」の音声情報

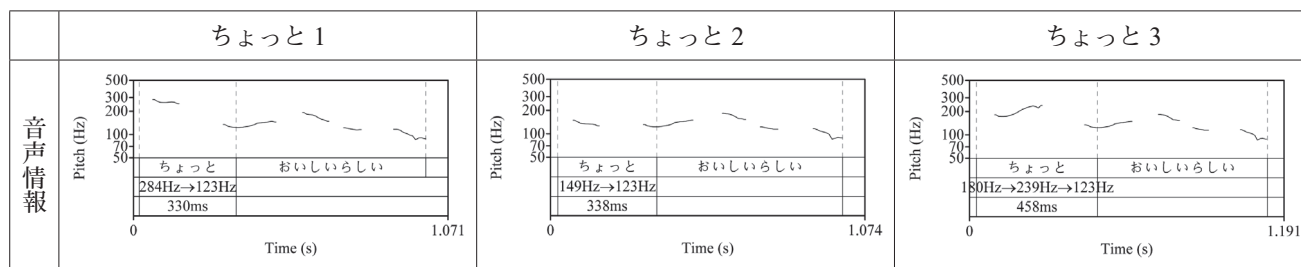


表3 「ちょっとおいしいらしい」の判断結果

表3-1	ちょっと1	ちょっと2	ちょっと3	表3-2	ちょっと1	ちょっと2	ちょっと3
少しだけ	24 (20%)	10 (8.3%)	8 (6.7%)	本義	24 ▲	10 ▼	8 ▼
普通に	36 (30%)	48 (40%)	16 (13.3%)	非本義	86 (71.7%)	98 (81.7%) ▲	76 (63.3%) ▼
普通以上	40 (33.3%)	42 (35%)	49 (40.8%)				
とても	10 (8.3%)	8 (6.7%)	11 (9.2%)	不自然	10 ▼	12 ▼	36 ▲
不自然	10 (8.3%)	12 (10%)	36 (30%)	カイ二乗検定の結果： $\chi^2=35.312, df=4, p=.000<.05$ (▲は有意に多い、▼は有意に少ない。以下略す。)			
総計	120	120	120				

表2に示すように、「あの店、ちょっとおいしいらしい。ぜひ行くといいよ。」という文脈では、「おいしい」の音声は同じである。表3-2に示すように、三種類の「ちょっと」の解釈には、有意な差がある ($\chi^2=35.312, df=4, p<.05$)。つまり、「ちょっと」の音声的要因によって、その意味解釈が異なることが明らかになった。「ちょっと1」と「ちょっと2」との間、「ちょっと1」と「ちょっと3」との間、「ちょっと2」と「ちょっと3」との間に、(13)に示すように、それぞれに有意な差がある。

(13) 「ちょっと1」と「ちょっと2」 $\chi^2=6.729, df=2, p=.035<.05$

「ちょっと1」と「ちょっと3」 $\chi^2=23.313, df=2, p=.000<.0167$

「ちょっと2」と「ちょっと3」 $\chi^2=15.004, df=2, p=.001<.025$

(多重比較のため、Holm-Bonferroni補正によって有意水準を調整する。以下略す。)

「ちょっと1」は本義だと判断された回数が有意に多い⁽⁶⁾。「ちょっと3」では「不自然」の回数が有意に多い。「非本義」だと判断された回数は、「ちょっと2」は81.7%、「ちょっと1」は71.7%、「ちょっと3」は63.3%であり、「ちょっと2」の方がやや多い。また統計の結果から見ると、「ちょっと2」と「ちょっと3」との間では「ちょっと2」の非本義の回数は有意に多く、「ちょっと1」との間では、差異が著しくない。比率と残差を総合的に見れば、「ちょっと2」は「非本義」の意味として解釈される傾向があると推測される。

文脈的效果として、第2節で論述したように、「ぜひ行くといいよ」はプラス評価のことを相手にすすめる文脈であるため、一定の程度以上であるはずだと推測され、非本義の「普通に・普通以上」という解釈に導くと考えられる。「ちょっと」の音声的效果から見ると、「ちょっと1」と「ちょっと2」はレギュラーな音声で発音されている場合、非本義として解釈されやすい。特に、「ちょっと2」は「ちょっと1」と比べ、ピッチ

(6) 「ちょっとおいしいらしい」の場合では、「おいしい」というプラス価値によって、何かをすすめる文脈は想起しやすい。特に中高年層 (27歳~70歳) の協力者にこのような傾向が見られる。今回の調査では、若年層 (20歳~22歳) では低程度の解釈も多く見られた。この意味解釈のパリエーションについての分析は別の機会に譲りたい。

レンジがより小さく、音声的效果として、「ちょっと」そのものを本義として強調されているわけではないため、文脈に応じて非本義として解釈される傾向が強い。

一方、イレギュラーな音声で「ちょっと3」と発音される時、相手にすすめる文脈では、「ちょっと」がイレギュラーな音声で強調されると、文脈的效果と相容れないため、不自然さが生じるものと推測できる。

実験文1のような相手にすすめる文脈では、ポライトネスの緩和機能として、「すごく」とは言わず、「ちょっと」の本義を利用して話者の評価を緩和し、自分の強いすすめを押し付けがましくなく感じさせ、相手に判断の余地を与える。それと同時に、相手にすすめるという文脈的效果と「ちょっと1」と「ちょっと2」の音声的效果から、実際には「普通に」或いは「普通以上」という解釈を誘発できる。したがって、非本義の「普通に・普通以上」という推意が読み取れる。

4.2 「ちょっと」+マイナス評価の形容詞

次は、実験文(10-2)「ちょっと遅いよ」の音声情報を表4に、判断結果を表5にまとめた。

表4 「ちょっと遅いよ」の音声情報

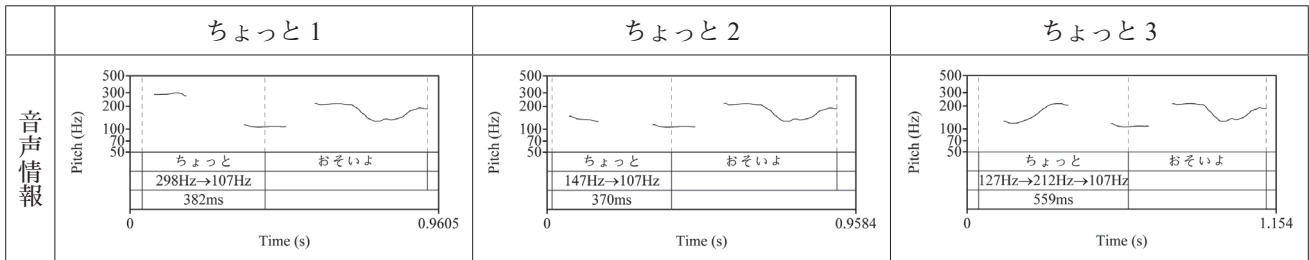


表5 「ちょっと遅いよ」の判断結果

表5-1	ちょっと1	ちょっと2	ちょっと3	表5-2	ちょっと1	ちょっと2	ちょっと3
少しだけ	41 (34.2%)	19 (15.8%)	14 (11.7%)	本義	41 ▲	19	14 ▼
普通に	25 (20.8%)	41 (34.2%)	12 (10%)	非本義	78 (65%) ▼	101 (84.2%) ▲	93 (77.5%)
普通以上	33 (27.5%)	40 (33.3%)	50 (41.7%)				
とても	20 (16.7%)	20 (16.7%)	31 (25.8%)	不自然	1	0	13 ▲
不自然	1 (0.8%)	0 (0%)	13 (10.8%)	—			
総計	120	120	120				

表4に示すように、「ちょっと遅いよ」という文脈では、「おそいよ」の音声が同じである。「0」のセルがある場合、Fisherの直接法で検定を行う。「ちょっと1」と「ちょっと2」との間、「ちょっと1」と「ちょっと3」との間、「ちょっと2」と「ちょっと3」との間に、(14)に示すように、それぞれに有意な差がある。

(14) 「ちょっと1」と「ちょっと2」 $\chi^2=12.006, p=.001<.05$

「ちょっと1」と「ちょっと3」 $\chi^2=24.856, df=2, p=.000<.0167$

「ちょっと2」と「ちょっと3」 $\chi^2=16.087, p=.000<.025$

つまり、「ちょっと遅いよ」という文脈では、「ちょっと」の音声的要因によって、その意味解釈が異なることがわかった。

さらに、2×2のカイ二乗分析によって、「ちょっと2」で発音される時、「非本義」の回数が有意に多い。そのうち、表5-1に示すように、「普通に」と「普通以上」と判断された回数は全回数の約7割を占めている。この場合、「ちょっと」は修飾の位置に立っているが、「ちょっと」そのものは強調されず、本義の意味が薄くなり、非本義の解釈が誘発できる。

これに対して、「ちょっと1」で発音される時、「非本義」として判断された回数は少ないわけではないが、

「ちょっと2」や「ちょっと3」と比べると有意に少ない。これと同時に、「本義」として判断された回数は有意に多い。それは、「ちょっと」の「本義」の意味が残っているからだと思われる。

そして、「ちょっと3」で発音される時、「本義」として判断された回数は有意に少なく、「不自然」の回数は有意に多い。また、表5-1に示すように、「普通以上」と「とても」の回数が比較的多く、全回数の67.5%を占めている。それは、「ちょっと3」の場合、イレギュラーな音声であるがゆえに、本義から離れた解釈を誘発しやすいからだと考えられる。つまり、「ちょっと3」の場合は「普通以上・とても」として解釈されやすい傾向が見られる。

「ちょっと遅いよ」では、「本義」で「ちょっと」は非難や不満を緩和する機能を持っている。しかし、話し手が文句や不満を相手に言い出す文脈であるため、「ちょっと」を使っている相手にも「遅さ」を明確に伝えたいと判断される。このため、文脈的效果として、「ちょっと」の「非本義」の程度という推意が読み取れる。音声的效果から見ると、「ちょっと2」の場合、「低程度」である本義が薄くなり、文全体に非本義の程度として解釈されやすい傾向が見られる。特に、イレギュラーな音声である「ちょっと3」で明確に強調されると、「普通以上・とても」という解釈を誘発しやすくなる。

4.3 比較文の「ちょっと」

次は、実験文(10-3)「昨日よりちょっと寒いよ」の音声情報を表6に、判断結果を表7にまとめた。

表6 「昨日よりちょっと寒いよ」の音声情報

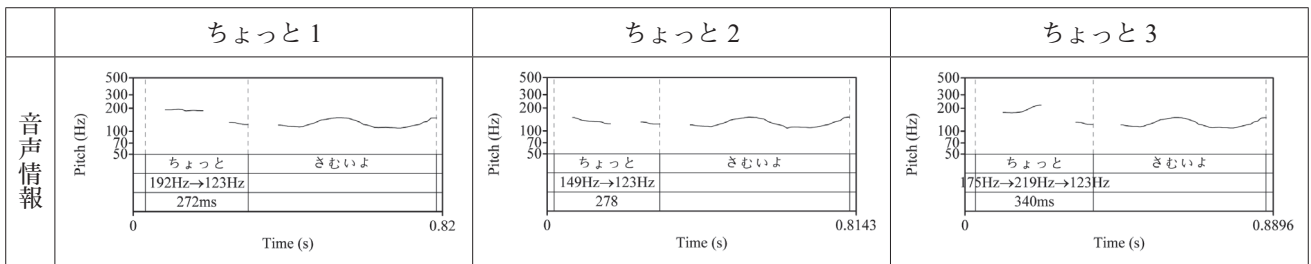


表7 「昨日よりちょっと寒いよ」の判断結果

表7-1	ちょっと1	ちょっと2	ちょっと3	表7-2	ちょっと1	ちょっと2	ちょっと3
少しだけ	101 (84.2%)	86 (71.7%)	47 (39.2%)	本義	101 ▲	86	47 ▼
普通に	11 (9.1%)	21 (17.5%)	36 (30%)	非本義	19 (15.8%) ▼	32 (26.7%)	67 (55.8%) ▲
普通以上	8 (6.7%)	10 (8.3%)	27 (22.5%)				
とても	0 (0%)	1 (0.8%)	4 (3.3%)				
不自然	0 (0%)	2 (1.7%)	6 (5%)	不自然	0	2	6 ▲
総計	120	120	120	—			

表6に示すように、「昨日よりちょっと寒いよ」という比較文では、「さむいよ」の音声と同じである。「ちょっと1」と「ちょっと2」との間、「ちょっと1」と「ちょっと3」との間、「ちょっと2」と「ちょっと3」との間に、(15)の示すように、それぞれに有意な差がある。

(15) 「ちょっと1」と「ちょっと2」 $\chi^2=6.121, p=.026<.05$

「ちょっと1」と「ちょっと3」 $\chi^2=54.126, p=.000<.0167$

「ちょっと2」と「ちょっと3」 $\chi^2=25.810, df=2, p=.000<.025$

つまり、「昨日よりちょっと寒いよ」という文脈では、「ちょっと」の音声的要因によって、その意味解釈が異なることが明らかになった。

「ちょっと」が「ちょっと1」・「ちょっと2」で発音される時、「少しだけ」として選択された回数はそれぞれ

れ101回・86回であり、全回数の7割以上を占めている。そのうち、2×2のカイ二乗分析によって、「ちょっと1」で発音される場合、本義である「少しだけ」が選択された回数是有意に多く、「非本義」の回数は有意に少ない。つまり、比較文では、「ちょっと」という表現が本義の「少しだけ」として解釈される傾向が強い。

イレギュラーな音声で「ちょっと3」で発音される場合、「ちょっと1」と「ちょっと2」と比べて見ると、「少しだけ」の回数は有意に少なく、「非本義」の回数は有意に多い。しかし、「ちょっと3」について、本義として選ばれた回数は47回(39%)で、非本義として選ばれた回数は67回(56%)であり、有意に差がある。つまり、強調された「ちょっと3」は「非本義」の意味解釈としてされる傾向が強い。

秋田(2005)は、比較表現において、「ちょっと」は「小程度・少量を表す」と指摘している。程度を比較する文脈では、より正しい情報を伝えようとするため、文脈的效果によって「ちょっと」は本義として理解されやすい。レギュラーな音声の「ちょっと1」「ちょっと2」で発音されると、文脈的效果と音声的效果は一致して、「少しだけ」という本義の意味解釈を誘発しやすい。一方、イレギュラーな「ちょっと3」で発音されると、別の意図を読み込んでしまい、「非本義」の解釈が多くなっている。この場合、イレギュラーな音が「非本義」としての解釈を誘発することが推測される。

4.4 疑問文に対する答えの「ちょっと」

次は、実験文(10-4)「ちょっとできます」の音声情報を表8に、判断結果を表9にまとめた。

表8 「ちょっとできます」の音声情報

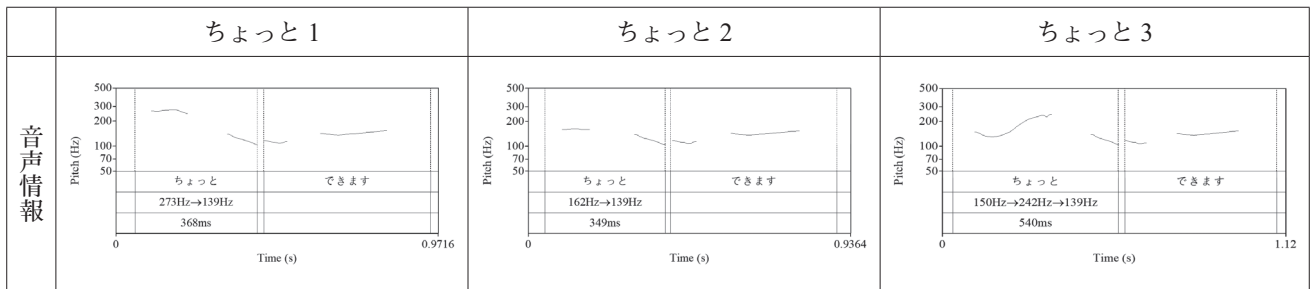


表9 「ちょっとできます」の判断結果

表9-1	ちょっと1	ちょっと2	ちょっと3	表9-2	ちょっと1	ちょっと2	ちょっと3
少しだけ	70(58.3%)	72(60%)	38(31.7%)	本義	70	72	38 ▽
普通に	41(34.2%)	38(31.7%)	21(17.5%)	非本義	50(41.7%)	42(35%)	33(27.5%) ▽
普通以上	7(5.8%)	1(0.8%)	12(10%)				
とても	2(1.7%)	3(2.5%)	0(0%)				
不自然	0(0%)	6(5%)	49(40.8%)	不自然	0	6	49 ▲
総計	120	120	120	—			

表8に示すように、「ちょっとできます」という疑問文に対する答えでは、「できます」の音声が同じである。「ちょっと1」と「ちょっと2」との間、「ちょっと1」と「ちょっと3」との間、「ちょっと2」と「ちょっと3」との間に、(16)に示すように、それぞれに有意な差がある。

(16) 「ちょっと1」と「ちょっと2」 $x^2=6.798, p=.034<.05$

「ちょっと1」と「ちょっと3」 $x^2=76.592, p=.000<.0167$

「ちょっと2」と「ちょっと3」 $x^2=45.207, df=2, p=.000<.025$

つまり、「昨日よりちょっと寒いよ」という文脈では、「ちょっと」の音声的要因によって、その意味解釈が異なるという結論が得られる。

さらに、2×2のカイ二乗分析によって、「ちょっと1」と「ちょっと2」との間に、「本義・非本義」として選択された回数には有意な差がない。また、「ちょっと」が「ちょっと1」「ちょっと2」で発音される時、「本義」の「少しだけ」として選択された回数は全回数の58%以上を占めており、「ちょっと3」と比べて有意に多い。また、イレギュラーな音声で「ちょっと3」と発音される時、「不自然」の回数は有意に多く、「本義」の回数も「非本義の程度」の回数も有意に少ない。

疑問文の回答に用いられる場合、答えとして正確な情報を提供しようとするため、「ちょっと1」と「ちょっと2」の音声の本義の「低程度・少量」を表すと考えられる。また、本義で謙遜を表す表現として使う可能性もあるが、「すごくできる」と読み取らせる情報は他にないため、本義で解釈できる。イレギュラーな音声で答えると、相手のより正しい推論を誘発できない可能性がある。

4.5 疑問文に対する答えの一語文の「ちょっと」との対照

実験文(11)「ちょっと」の音声情報を表10に、判断結果を表11にまとめた。

表10 一語文の「ちょっと」の音声情報

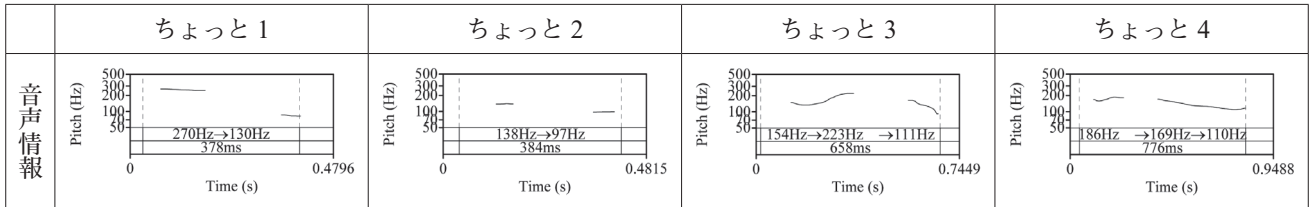


表11 一語文の「ちょっと」の判断結果

表 11-1	ちょっと1	ちょっと2	ちょっと3	ちょっと4	表 11-2	ちょっと1	ちょっと2	ちょっと3	ちょっと4
まったく ない	0(0%)	55(45.8%)	9(7.5%)	63(52.5%)	まったく ない	0	55 ▲	9	63 ▲
少しだけ	99(82.5%)	57(47.5%)	48(40%)	32(26.7%)	本義	99 ▲	57	48	32
普通に	16(13.3%)	3(2.5%)	16(13.3%)	3(2.5%)	非本義	21(17.5%)	3(2.5%)	23(19.2%)	6(5%)
普通以上	5(4.2%)	0(0%)	6(5%)	3(2.5%)				▲	
とても	0(0%)	0(0%)	1(0.8%)	0(0%)					
不自然	0(0%)	5(4.2%)	40(33.3%)	19(15.8%)	不自然	0	5	40 ▲	19
総計	120	120	120		—				

疑問文に対する答えとして、一語文の「ちょっと」は「ちょっとできます」に復元できる場合、「ちょっと」は程度修飾として扱われるが、復元できない場合、程度修飾としては扱われない。それは、「ちょっと……」で話し手の答えたくない気持ちから、マイナス的な意味として扱えるからである。

さらに、一語文の「ちょっと」の意味解釈にその音声的效果もかかわっている。カイ二乗検定と Fisher の直接法の検定によって、4種類の「ちょっと」の音声的效果にはそれぞれに有意な差が見られた。

「ちょっと1」で発音される場合、「少しだけ」と判断された回数は全回数の82.5%を占めており、有意に多い。これは実験文(10-4)「ちょっとできます」で答えとして正確な情報を提供する時に、「ちょっと1」というレギュラーな音声で本義の「低程度・少量」を表すのと同様である。また、「ちょっと3」というイレギュラーな音声で発音される場合、「不自然」として判断された回数は有意に多い。今回の調査では、「まったくない」を選ぶ回数はかなり少なく、「できない」として解釈しにくいいため、彭(1990: 71)⁽⁷⁾の結果と一致していないと思われる。

「ちょっと4」で発音される場合、「できない」として判断された回数は5割を超え、有意に多い。また、「少

しだけ」として判断された回数は有意に少ない。これは「と」の音声の延長により、感動詞的に使われ、答えにくさから程度解釈以外の回答が予測されると考えられる。

「ちょっと2」で発音される場合、「ちょっと4」と比べて、「まったくない」として判断された回数には有意な差がない。「ちょっと1」や「ちょっと3」の音声と比べて見ると、「ちょっと2」が著しく低く発音され、且つそのピッチレンジが小さい。この場合、話者の答えたくない感情から、「ちょっと」で「ちょっとだけできる」ではなく、「まったくできない」というマイナス的解釈が読み取れる。

言い換えると、答えとして低く発音された「ちょっと2」が使われると、「たいしたことではない、明確に答えたくない」というような意味を表している。このように、「ちょっと」が「消極的な答え」を暗示した結果、「低程度」という本義から離れ、マイナス的解釈が導かれる。

5. おわりに

本稿は各文脈において程度修飾の「ちょっと」の意味解釈に関する音声的要因について考察した。程度修飾用法としての「ちょっと」の意味解釈においては、文脈的要因・音声的要因の両方が影響するものと結論づけられる。

文脈ごとに見ると、プラス評価のことを相手にすすめる文脈では、一定の程度以上であるはずだと推意され、非本義の「非低程度」という推意が誘発できる。この場合、「ちょっと1・ちょっと2」というレギュラーの音声で発音されると、「非本義」という解釈に導きやすい。特に、「ちょっと2」の音声は「ちょっと」そのものを本義として強調されるわけではないため、文脈に応じて非本義として解釈される傾向が強い。

また、「ちょっと遅いよ」というような話者が文句や不満を相手に伝えるマイナス評価の文脈では、「ちょっと」を使っても相手に「遅さ」を明確に伝達したいと判断される。このため、文脈の効果として、「ちょっと」の「非本義の程度」という推意が読み取れる。音声的效果から見ると、「ちょっと2」の場合、「低程度」である本義が薄くなり、文全体に非本義の程度として解釈しやすい傾向が見られる。また、イレギュラーな音声である「ちょっと3」で明確に強調されると、「普通以上・とても」という解釈を誘発しやすくなる。

さらに、程度比較文や疑問文の答えに用いられると、「ちょっと1・ちょっと2」は本義の「低程度・少量」を表しやすい。このような推意する必要のない文脈では、イレギュラーの「ちょっと3」で発音されると、「不自然さ」を感じさせ、うまく推意を読み取れない可能性があると推測される。

この他、一語文では「ちょっと4」と「ちょっと2」が使われると、答えたくないことを示す標識として使われ、マイナス的な意味を表す傾向が強い。

まとめて見ると、文脈的要因と音声的要因はどちらも「ちょっと」の意味解釈に影響する。程度修飾の「ちょっと」はポライトネスの「控えめ」表現として使われていると同時に、関連性理論の観点から、文脈的要因と音声的要因から推意できる非本義の程度を誘発できる。相手へのすすめ、不満の伝えや一語文などの文脈の解釈によって、「ちょっと」は本義の「低程度・少量」から「非本義」である「非低程度・非少量」かマイナス的な意味という語義に拡張できる。同一の文脈では、低く発音される「ちょっと」や「低高低」で発音される「ちょっと」のように、異常性を帯びる音声的要因から「ちょっと」の非本義の意味解釈を誘発しやすい傾向がある。即ち、程度修飾として使われる「ちょっと」の意味解釈に関しては、文脈的要因は一次的要因であり、音声的要因は二次的要因であることが明らかになった。

今回の調査によって、特定の文脈において、「ちょっと」の発音の仕方もその意味解釈に影響があることが明らかになった。イレギュラーな「ちょっと」の音声的效果と言っても、多様な発音があり得る。本稿はあく

(7) 表 13 一語文の「ちょっと」の三通りの解釈と四種類の音声モデルとの対応関係 (彭 1990: 71)

	モデル A	モデル B	モデル C	モデル D
①少しだけできる	○	○	×	×
②「一応、人並みに」できるといふ謙遜的表現	○	○	×	×
③できない	○×	○?	○	○

まで、イレギュラーな音声のさまざまなバリエーションにおける典型的な音声について調査した。今後は文全体のイントネーションなどの音声的效果も含めて、さらに調査を進めていきたい。

【辞典・辞書】

- 『日本国語大辞典』（1972 第一版、2004 第二版第四刷）小学館
 『大辞林』松村明〔編〕（1988 第一版、2006 第三版）三省堂
 『広辞苑』新村出〔編〕（1960 第一版、2008 第六版）岩波書店
 『明鏡国語辞典』北原保雄〔編〕（2002 第1版、2010 第2版）大修館書店

【参考文献】

- 秋田恵美子（2005）「現代日本語の「ちょっと」について」『創価大学別科紀要』17,72-89.
 郡史郎（1989）「強調とイントネーション」『講座日本語と日本語教育2 日本語の音声・音韻（上）』明治書院.
 中道真木男（1991）「副詞の用法分類—基準と実例—」『副詞の意味と用法』大蔵省印刷局.
 仁田義雄（2002）『副詞的表現の諸相』くろしお出版.
 彭飛（1990）『外国人を悩ませる日本人の言語習慣に関する研究』和泉書院.
 渡辺実（1990）「程度副詞の体系」上智大学国文学論集 23,1-16.
 山岡政紀・牧原功・小野正樹（2018）『日本語語用論入門：コミュニケーション理論から見た日本語』明治書院.
 Brown and Levinson. 1987. *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge.
 Sperber, D and Wilson, D. 1995. *Relevance: Communication and Cognition*. Cambridge.